

薩摩

おじい

横光 晃

角川書店

薩摩

おごじ

横光 晃

角川書店

薩摩おしよ

昭和四十八年九月十日 初版発行

著 者 横光 晃

発行者 角川源義

印刷者 村沢達弘

製本者 宮田四郎

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三・郵便番号一〇二
振替東京一九五二〇八・電話東京(03)二六五一七一一

定 価 六百九十円

落丁・乱丁本はお取り替えます

Printed in Japan

旭印刷・宮田製本

0093—872121—0946(0)

目次

文明開花と赤い月	五
西南、燃ゆ	四
死の影を見ながら	一〇七
民権と憎惡の季節	一五二
鹿鳴館の夢	二四
復権の鞭	二三七
茨の新天地	二七〇
不死鳥	二九五

薩摩おごじよ

薩摩では、若い女をおごじよと呼んだ。

文明開化と赤い月

一

千切れた風たぎのように、かもめが外人居留地の上をかすめて飛んだ。何に怯おびえたのか、港の空を忙しくさまよう。かもめの声に合せて、汽笛がもの悲しく泣いた。岡蒸氣が横浜のステーションを離れた。鹿児島から、ふじをはるばる連れて来た蒸氣船は、薄よごれた港とともに、みるみる遠去とんずかたて行く。

「いよいよ東京じゃ」

ふじは呟つぶやいて、唾つばを飲んだ。客車の窓の外を眺めて、流れ過ぎる家並みの速さに、大きな目をさらに見はつた。岡蒸氣に乗るのは初めての経験である。いや、ふじには何もかもが初めてずくめだった。鹿児島鹿児島の若い女おごじょが一人で遠い旅に出ることからして、まれなことだった。女を低く見るのは、日本の古い習わしだが、九州鹿児島鹿児島の男尊女卑男尊女卑よりは特に知られている。明治の頃までは、女たちは外出さへ思うに任せず、家の中でも、食事は一段下がった板の間でとっていたのだ。勉学のために故郷をはなれることなど論外だった。だが、何にでも例外はある。明治

九年の浅い春、十八歳の神山ふじは、例外の女として、独り鹿児島を旅立ったのである。

——お母様は、まだ氣をもんで、おいやつとしやろうか……

出立の日の母の大騒ぎを思い出して、ふじは、くすつと笑った。

「おふじは笑いすぎもんど」

あの朝、母のくめは、ふじをたしなめて、掛軸に添えていた手をぱとはなした。ふいに軸が開き、牙をむいた虎が、ふじの目に躍りこんできた。一瞬虎の咆哮が聞えたように思え、ふじは息を飲んだ。軸に描かれた虎が、巖を踏まえて、四囲を圧していた。母がいかめしくいった。

「女子に旅立ちの作法はごわはんで、男の作法に準じもす。よかですか。男でも、江戸大坂へ上るときは、虎の尾を踏む覚悟がいったのですよ。まして、旅立ちの作法もなか女子が、何もひとりで何百里も……」

いつの間にか、母の言葉は愚痴に変わっていた。

「お前のお兄様の騎一郎さんと征史郎どんが決めやった事じゃから、仕方なかどん……なにも、女子のお前が西洋の学問など……」

「御一新で世の中が変わったとですもの、女子も変らなくては」

娘の言葉に母は微笑して、ふじを土間へ導き、右左、向きを逆さにおいた木履を踏ませた。行っても必ず戻ってくるようにとの願いをこめた作法である。それが済むと、道中用にと護符や薬やあれこれ持たせた上で、旅の心得を聞かせた。

「一つ、道中たえ話しかけられても男子とは、みだりに口をきかぬこと。悪か男が多いそうじゃから。」

一つ、万事つましく我を張らず、決してお兄様たちの意に叛かぬこと。

一つ、行儀正しく、誰にでも、たやすく笑顔を見せぬこと……」

最後に、節をつけて朗々と、

「苦も楽も心一つによるものを

つとめば後ぞ楽しかりける」

旧藩主の歌を詠み、

「元氣で行っておじゃんせ」

と結んだとき、母の目には光るものが浮んでいた。

岡蒸気の振動に身を任せながら、いつかふじも目をうるませていた。汽笛の音にはっとわれに返り、ふじはすわりなおした。

「いけない、東京に着く前から、こげんめそめそして」

ふじを東京へ呼んだのは、腹ちがいの兄たち、神山騎一郎・征史郎の兄弟である。二人は軍人だった。維新の戦いで共に功をたて、騎一郎は中佐に、征史郎は少佐に進んでいる。戦場では、敵の肝を挫ぐこの兄たちも、年のはなれた妹には優しかった。薩摩方の中堅として将来を約束され、文明開化の東京に腰を落ちつけると、娘のようなふじを、新しい時代に似つかわしい女に育

てようとしたのである。

汽笛がまた鋭い声をあげ、岡蒸気は新橋のステーションにすべりこんだ。ふじはホームに降り立って、迎えを探した。客はぞろぞろ出札口を出て行く。ホームに人影は少なくなった。迎えらしい姿は見当らない。着く時刻はわかっているのに！ と、ふじは口をとがらした。

「お嬢さん」

背後から声がした。振り向くと、異人のように洋服姿のよく似あう三十ぐらいの男が笑みを浮べて立っている。

「迎えの人をお探しですか」

齒切れのいい東京言葉である。

「見つかりませんか」

「はい」

「どちらへ、いらっしゃるんです」

「はい、あのう」

と答えかけて、ふじは、はっと母の戒めを思いだす。——男子とはみだりに口をきかぬこと。悪か男が多いそうじゃから。

「よかったら、お送りしますよ」

「いえ、一人でまいます」

ふじはさっさと歩きだす。その時ドンと大きな音が響きわたった。びくっとして足をとめると、

「ドンです」

男がいった。

「十二時だという合図。ドン」

「ああ、ドン」

ふじは思わず微笑^{ほほえ}んだ。——誰にでもたやすく笑顔を見せぬこと……母の声がよみがえる。ふじは、急いで笑いをひっこめて歩きだした。

三度、道を訊^{たず}ねただけで、ふじは何とか、兄たちの住む邸^{やしき}に辿^{たど}りついた。鹿児島の家以上の立派な構えである。ふじは唇をきゅっと結んで、門をくぐった。勝手口へ向う。

「ごめんなさったもんせ」

戸をあけると、切れ長の美しい目の女が、おやという表情で振りかえった。

「鹿児島のふじですが」

「おふじさん？」

「はい、お義姉^{ねえ}さまですか」

「よねです」

騎一郎兄の妻よねだった。

「初めまして。ただいま着きました」

「よく来ましたね」

「はい。では上がらせていただきます」

「お待ちなさい」

義姉は、ちよつと厳しい声で制した。

「お入れできませんよ」

ふじはまごつく。はるばる鹿児島から辿りついたのに、何ということだろう。

「使用人みたいに、勝手口から何です。玄関から、どうぞ」

もう一度、ふじはまごつく。勝手口から出入りするようにしつけられている。男の場所である玄関から入るなど、もつての外なのだが……

「それでも、私は女子ですから」

「ああ、鹿児島じゃ、そうなのね。でも、ここは東京ですよ。さあ、玄関から堂々と」

よねは楽しそうにふじを外へ押し出した。ふじが恐る恐る玄関に入って行くと、もう、よねと女中が出迎えていた。豪快な笑い声をたてて、上の兄が出て来た。

「来たか、おふじ」

「騎一郎お兄様」

「大きゅうなつたなあ」

騎一郎はしげしげとふじを眺めて、

「俺の妹にしては美人じゃ。母親の違うせいかな」

と、また笑った。下の兄が騎一郎の背後に立った。

「征史郎お兄様」

征史郎はまだ独身である。美しく成長した妹を眩しそに見て、

「背中が曲つとるぞ」

と、いった。ふじは慌てて背筋を伸ばし、髭を蓄えた、父親ほども年の違う兄たちを、なつかしく見つめた。

「迎えにも出ないで、心細かったでしょう」

義姉がいたわると、騎一郎が機嫌よく笑って、

「初めから甘やかしたらいかん。まず東京の町で、家を探させるのも勉強じゃ。——征史郎がそう言うんでな……どうじゃ、勉強になったか」

「はい」

ふじは、元気よく答えた。

案内された茶の間に入ろうとして、ふじはぎくつと立ち止まった。中に新橋駅で会った男がいたのだ。

「さきほどは」

男は微笑んだ。目の光が強い。微笑の蔭から、後退りしたくなるような霸氣が伝わってくる。

「お前、この人を人拐いのように扱ったそうじゃな」

征史郎がにやにやしながらいった。

「あのう、私……」

ふじは、またまごつく。

「滝村さんだ。いろんな事業をやっておいでじゃ」

ふじは言葉に窮して、黙って頭を下げる。騎一郎が家中にひびきわたるような声で笑ってから説明した。

「おふじに一人歩きの勉強をさせるにしても、あまりとつけんか迷い方をされても困る。それで、征史郎が滝村さんに護衛を頼んだとじゃ」

やっと、ふじも挨拶の言葉が見つかった。

「ご迷惑をおかけしました」

「いや、今日はちょうど新橋のほうに用事があったんですよ。しかし、私などが出しゃばる必要はなかったですな。道を探すのが上手でいらっしゃる。では、役目も終ったし、このへんで」

滝村は立ち上がった。よねがひきとめるのを、

「戦上手はひき際が早いと言いますから」

と、風が吹き抜けるように引きあげて行った。

滝村が帰ったのち、ふじは改めて上京の挨拶をした。廊下の障子の蔭から女の子が覗いていた。

「こら亮子、叔母様に挨拶をせんか」

騎一郎が怒鳴ると女の子はばたばたと逃げ去った。騎一郎とよねの娘、今年八歳の亮子である。

「しよんなか恥ずかしがり屋じゃ」

騎一郎はくすぐったいような顔をしてから、

「ところでおふじ、早速よか話があるぞ」と、征史郎と顔を見あわせた。

「お前の婿どんが、決まったとじゃ。おどろいたか」

確かに、ふじは驚いた。

「はい……でも私は、英語や……いろいろ学問を学ぶために……」

しどろもどろでいうのへ、

「ああ、いくらでも学べ。立派な許婚者いいなすけのおったほうが励みになるじやろうが」
兄たちは愉快そうである。

「あの、もしや、相手のお方は、さきほどの滝村さまでは……」

「いやあ違う違う。もっとずんと、よか男じゃ。おいたちの後輩でな、同じ鹿児島出の軍人じや。北嶋きたじまちゆうてな」

征史郎がつけ足した。

「明日来ることになっちよる。まあ、会うてみい。いっぺんに気に入るが」

「そいでん、あのう」

——万事つましく我を張らず、決してお兄様たちの意に叛かぬこと。
母の言葉を思いかえして、ふじは覚悟をきめた。

「おまかせしもんで」

「そうか、よかよか」

「よかったですね」

兄たちも義姉も嬉しそうに笑った。

妹を新時代の女性に育てようという兄たちも、妹の伴侶を自分たちで決めることに何の不審も抱いていない。それが当時の極くまともなしきたりだったのだ。ふじ自身もまだそのことを疑うほどの自我は持っていない。しかし、東京での第一夜、なかなか寝つかれないことは確かだった。

次の日の昼前、ふじは茶の間で義姉と花を^い活けていた。よねがちよっと席を外した時、玄関に客が訪れた。女中もいないらしい。二度三度と案内を乞う声がする。ふじが出て行った。端正な顔だちの若者が立っていた。

「どなた様でしょうか」

「北嶋ですが」

ふじは、はっとして、客の顔を見なおした。兄たちは、許婚者の姓は北嶋だと教えた。——では、この人が私の——ふじの胸は波立つ。書生姿のよく似あう若者は、緊張した表情でいった。

「お取りつぎください」

「はい、少々お待ちください」

そこへ、よねが急ぎ足で出て来た。

「おいでなさいませ。さあ、どうぞ」

ふじは、自分の部屋に戻って、胸の動悸^{どうき}を静めようとした。